

イタリア語の語尾切断現象 (1)

— 動詞の語尾切断 —

上野貴史

Il Troncamento della Lingua Italiana (1)

Takafumi UENO

Il troncamento è l'eliminazione della vocale finale atona di una parola dinanzi ad un'altra che cominci per vocale o consonante. Generalmente il troncamento non avviene in moltissimi casi. In questo studio faccio l'analisi del troncamento verbale da tre lati: fonologico, morfologico, e sintattico.

I risultati sono come segue; (1) Il troncamento avviene molto, quando parole polisillabe abbiano, davanti alla vocale finale *-e*, una consonante *r*. (2) Non avviene mai, quando un suono di una consonante davanti alla vocale finale è equivalente ad un suono di una consonante seguente. (3) Si verifica facilmente, quando una consonante seguente è più forte nello strato consonantico. (4) È difficile da troncarsi quando una consonante seguente è fonologicamente prossima ad una consonante davanti alla vocale finale. (5) Avviene molto nella forma infinitiva. (6) Nel verbo *regolare* non avviene. (7) Nel verbo irregolare avviene solitamente quando è il presente indicativo. (8) Il verbo *regolare* è difficile da troncarsi. (9) I troncamenti usati frequentemente si usano consuetudinariamente.

1. はじめに

イタリア語における *troncamento* は、語尾の 1 母音または 1 シラブルを切断する現象のことをいう。一般的にこのような現象は、イタリア語以外にもフランス語や中期英語の語末でのシュワー [ə] の脱落に見られる現象である。しかし、イタリア語の *troncamento* の場合、このような言語における「あいまい母音」の音消失とは異なり、[e], [o], [a] という音韻的に強い母音が切断

される¹⁾。また、一般的に音節構造の過程が CV 音節構造型に向かう²⁾といわれているにもかかわらず、イタリア語の *troncamento* は、子音の前の母音を削除し、開音節構造を持つイタリア語をわざわざ閉音節にするということにおいても異質であるといえる。

このようなイタリア語における *troncamento* に関して、しばしば標準イタリア語の文法書では、*troncamento* が可能な条件として、語末母音の前の音、切断される母音、次に来る語の語頭等の

条件⁹⁾といった音韻的な側面から説明している。しかし、この現象は頻繁に起こるものではなく、このような条件がそろってもほとんど *troncamento* が起こらない⁹⁾。また、この現象に対して、現在では音韻的な条件に限られた研究のみがなされているだけで、その他の面からのアプローチはほとんどなされていないのが現状である。

そこで本稿では、動詞に限定して、音韻・形態・統語の三つの側面から *troncamento* を分析していくことにする。このような分析からイタリア語における *troncamento* 現象の傾向を考察するのが本稿の目的となる。

2. 先行研究の検討

従来からの研究においては、主に音韻面からこの現象が説明されている。まずその先行研究について若干触れておくことにする。*troncamento* は、一般的に文の語呂を良くするために語末の母音を切断するものであるが、これはいかなる状況でも起こるものではなく、ある一定の規則があるとされている。先行研究では、主に音韻的な二つの切断条件からこの規則を説明している。つまり切断される音とその前にくる音の条件である。*troncamento* される音韻について Ceppellini (1990 : 515)では、次のような記述が見られる。(波線は筆者による。以下の引用についても同様)

Il *troncamento* si verifica solitamente quando la vocale finale è una e o una o ; se è una g, la parola si tronca solo in *ora (or ora)*, *suora (suor Anna)* e nei composti di *allora e ancora (allorché, ancor ieri)*.

切断される語末母音は、-e, -o, -a, となっているが、本稿で扱うのが動詞に限っているので、-e, -o に限定される。ここで注意しなければならないのは、イタリア語の e, o にはそれぞれ二種類の音声学上分類される音声があるということである⁹⁾。しかし、これに関して Ceppellini は続けて次のように述べている。

eliminazione della sillaba o della vocale finale atona di una parola dinanzi ad un'altra che cominci per vocale o consonante.

よって「無強勢語末母音の省略」であるので、切断される音韻はすべて閉口母音 [e]と [o]ということになる。

次に標準イタリア語における *troncamento* が起こる場合の直前の音韻に関して、Serriani (1988 : 27)は次のように述べている。

La consonante che precede la vocale finale deve essere una liquida (l, r) o una nasale (n, m). Nel caso di m l'apocope - sostanzialmente limitata alla 4ª persona dei verbi - è rara.

「m はまれである」という記述があるが、幅広く分析するためにはこの可能性を無視するということはできない。よって語末母音に先行する子音は流音と鼻音ということになる。l, r, m は綴字と発音が一致しそれぞれ [l], [r], [m]になる。一方, n はその状況に応じて三つの音韻を持つが⁹⁾, *troncamento* の条件から [n]に限定される。

一般的なイタリア語の文法書の記述によるこのような規則⁷⁾が、実際のデータにおいてどのように適応し、一般化できるかを次に分析してみる。

3. 分析

本稿で使用したデータとしては、19世紀の前半に活躍した Leopardi の二つの散文作品である *Operette Morali* (以下、OPと略す)と *Pensieri* (以下、PEと略す)を取り上げデータ⁸⁾を收拾することにした⁹⁾。この Leopardi の二つの散文の中には、動詞¹⁰⁾で *troncamento* が起こっている例は、13,414語中332例で約2%に過ぎない。確かに「ほとんどの場合」は起こってはいないが、それではどういう場合にこの現象が起こるのかを分析していくことにする。

3. 1. 音韻的側面

まず、音韻的な側面について 2. で考察した先行研究の指摘が Leopardi の作品において、どの程度当てはまるのかを最初に検討してみる。二つの作品の中でこの現象が起こる動詞の用例は、OP が 257 例、PE が 75 例、合計 332 例である。まずこの切断音を <表 1> に示した。<表 1> では、

表 1 語末の切断音

作品 切断音	OP	PE	合計
-e	249	75	324
-o	4	0	4
-re ¹¹⁾	4	0	4

切断音に顕著な片寄りが見られる。この表から見て分かるように、troncamento されている切断音のうち約 98% が -e ([e]) である。尚、OP 中の -o の切断の例は、次に挙げる例のように、すべて essere の直説法一人称単数現在形、または三人称複数現在形である。この動詞以外の語末の -o は、troncamento されていない。(テキストのイタリック体の箇所は筆者による。以下も同様)

- (1) Ci son poco atto (OP, p.692)
「とてもそんな気持ちにはなれない」
- (2) …… mentre son vivo (OP, p.883)
「私が生きている間」

次に troncamento されている直前の子音を調査した<表 2>。この調査で m の後での tronca-

表 2 troncamento 直前の子音

作品 直前音	OP	PE	合計
r	230	69	299
l	14	4	18
n	13	2	15

mento の例は、1 例も見られなかった。これは動詞が一人称複数の場合、全く troncamento は行われていないということであり、直前の音韻は [r], [l], [n] の場合に限られているという Seriani の記述の正当性を示すものである。またこの表が示すように、直前の音韻は約 90% が [r] である。つまり動詞における troncamento は、直前の音韻が [r] で troncamento される音韻が [e] である場合に、この現象が起こりやすいということが分かる¹²⁾。これは troncamento されている動詞の形態と深く関わることであるが、このことは、3. 2. で述べることにする。

これまでの分析においては、2. で考察した文法書の記述と頻度の問題は別にしても、ほとんど一致していることが分かる。しかし、これでは、どのような場合にこの現象が起こっているかは全く説明できない。そこで troncamento の起こる直後の音韻がこの現象の何等かの傾向を示すものであると仮定し、考察してみることにする。そのため、收拾したデータに基づいて、troncamento された語の後にどのような音韻が続いているかを <表 3> に示す。この表では、特定の音韻の前で

表 3 troncamento の直前音と直後の音韻

直前音 直後の音韻	[r] (%)	[l] (%)	[n] (%)	合計 (%)
pausa ¹³⁾	0.7	—	—	0.6
[a]	0.7	—	—	0.6
[u]	1.3	—	—	1.2
[ε]	2.0	22.2	—	3.0
[e]	1.0	—	—	0.9
[o]	0.7	—	—	0.6
[ɔ]	0.7	—	—	0.6
[p]	13.4	5.6	6.7	12.7
[t]	3.4	11.1	13.3	4.2
[k]	22.1	16.7	6.7	21.1
[b]	4.0	—	—	3.6
[d]	7.4	22.2	13.3	8.4
[g]	1.7	—	—	1.5
[f]	5.4	11.1	26.7	6.6
[s]	3.0	—	6.7	3.0
[v]	5.7	11.1	6.7	6.0
[dz]	1.7	—	—	1.5
[l]	12.7	—	—	11.5
[λ]	0.3	—	—	0.3
[m]	9.0	—	20.0	9.0
[n]	3.4	—	—	3.0

troncamento が起こるといふ顕著な傾向は見られないが、troncamento の起こらない場合の一つの特徴が見られる。具体例として例文(3)、(4)を挙げる。

- (3) …… e prima di *morire ricordati lasciare detto il luogo* (OP, p. 681)
 「そして死ぬ前にその場所について言っていたのを思い出す」
- (4) *Che m'ho a ricordare io che sono nemica capitale della memoria* (OP, p. 612)
 「私が記憶の最大の敵であるということをおぼえなければならぬじゃありませんか」

(3) では、ricordati の前の morire には troncamento は起こっていない。同様に (4) でも、nemica の前の sono にこの現象は見られない。このように troncamento が起こると同じ音韻が連続するような例は1例も見つからなかった。つまり troncamento が行なわれている直前の音韻と後続の語頭音は連続しないということがいえる。

さらに、このデータを基にして、音韻の分布を調音の様式別にまとめると、<表4>のようになる。この頻度の割合は、ほぼ音の強さの階層¹⁴⁾に

表4 調音の様式

直前の音韻 直後の音韻	[r](%)	[l](%)	[n](%)	合計(%)
	破裂音	51.8	55.6	40.0
摩擦音	14.1	22.2	40.0	14.8
鼻音	12.4	-	20.0	11.8
流音	13.0	-	-	11.8
母音	6.4	22.2	-	6.9
破擦音	1.7	-	-	1.5

一致している。つまり、頻度の高い音ほど強い階層の音になっている。このことにより、「ほとんど起こらない」 troncamento の起こり得る音韻的条件として、troncamento された次の音、つ

まり後続の語頭音が音韻的に強い場合に troncamento が起こりやすいということがいえる。

最後に、破裂音・摩擦音・破擦音における有声音と無声音との対立を示す<表5>。r, l, n, は

表5 有声音と無声音の対立

直前の音韻 直後の音韻	[r](%)	[l](%)	[n](%)	合計(%)
	無声音	47.4	43.8	57.1
有声音	20.6	37.5	21.4	21.5

いずれも有声音の特性を示すが、troncamento された語に後続する語頭音はいずれの音でも無声音の連続の優勢が目立っている。

この音の連続の分析から、切断音の直前の音韻とそれに連続する語頭音が、同じ音特性もしくは近い音特性を示す場合は troncamento が起こりにくい¹⁵⁾ということが指摘できる。

3. 2. 形態的側面

形態的側面においては、troncamento が起こっている動詞がどのような形態の場合に起こっているかを考察していくことにする。しかし音韻的な規則からその可能形態は限定されてくる。というのは、規則動詞¹⁶⁾についてはすべての法・時制の一人称複数、三人称複数、不定法不定詞が可能であり、不規則動詞¹⁷⁾については、規則動詞の可能形態に加えて切断される音韻の前の音が、[r], [l], [n] で切断される音韻にアクセントのない形態が可能であるからである。しかし、収集したデータの形態を調査してみると、troncamento が起こっている形態は不定法不定詞と直説法現在形のみであり、理論上可能である他の法、時制では全く起こっていないことが分かる<表6>。<表6>に

表6 troncamento の動詞形態

動詞形態	作品		合計
	OP	PE	
不定法不定詞	222	69	291
直説法現在 1 人称単数	1	0	1
直説法現在 3 人称単数	31	6	37
直説法現在 3 人称複数	3	0	3

おける OP の直説法現在三人称単数形での例は、vien (p.656), vuol (p.903), par (p.635), val (p.884), muor (p.684), appar (p.762), suol (p.829) の 7 種類 31 例である。PE は、divien (p.1163), suol (p.1154), vuol (p.1175), vien (p.1164) の 4 種類 6 例である。つまりこれらはすべて不規則変化をする動詞である。さらに直説法現在一人称単数と三人称複数の形態は、3. 1. で述べた son の 1 種類だけである。そしてこれらの他はすべて不定法不定詞である。このために、3.1. で示した troncamento される綴字がほとんど -e であって、切断の直前の大半が r になる。

次に troncamento の起こっている動詞の不定形の型¹⁸⁾ に注目して表にすると次のようになる<表 7>。この中で、第一群動詞の規則動詞は 37

表 7 動詞の型

作品 動詞の型	OP	PE	合計
第一群動詞	79	23	102
第二群動詞 ¹⁹⁾	130	28	158
第三群動詞	48	24	72

種類 40 例、不規則動詞は 5 種類 62 例、第二群動詞では規則動詞 5 種類 11 例、不規則動詞 22 種類 147 例、第三群動詞では規則動詞 6 種類 9 例、不規則動詞 6 種類 63 例見られる。三つの動詞群を合計すると、規則動詞は 48 種類 60 例、不規則動詞は 33 種類 272 例となる。そしてこれを詳細に各動詞群ごとに複数頻度のものを示したのが<表 8>である。表における動詞の後の数値はその出現度数を示し、不規則動詞にはアスタリスク(*) を付けた。この表から不規則動詞の troncamento は、かなり高い頻度を示していることが認められる。これは、不規則動詞は規則動詞と比べると、語末の母音が落ちて元形態や人称が分かりやすいということが関係しているためと思われる。

以上、形態的な側面から二つのことが指摘できる。第一は、規則動詞は不定法不定詞の場合でしか troncamento されないということである。この理由としては、イタリア語は動詞の活用語尾の

中に人称と数の概念が含まれ頻繁に主語を省略するため、規則動詞の活用語尾を切断すると主語が不明瞭になってしまうということが挙げられる。第二は、そのため不規則動詞が troncamento されやすいということである。筆者が収集したデータでは、8 割を越える動詞が不規則動詞である。

表 8 動詞の型の頻度

第一群動詞		第二群動詞		第三群動詞	
fare*	40	essere*	38	dire*	47
dare*	7	avere*	32	venire*	11
acquistare	4	volere*	21	morire*	4
lasciare	4	parere*	11	finire	2
mancare	3	potere*	9		
stare*	3	sapere*	6		
impetrare	2	solere*	6		
mutare	2	dovere*	4		
parlare	2	credere	4		
sperare	2	scrivere	3		
trovare	2	vedere*	3		
		porre*	3		
		vivere*	2		

3. 3. 統語的側面

最後に、統語的側面からこの現象を考察していくことにする。ここでは、データに見られた統語的特徴の三点から検討してみることにする。

3. 3. 1. 独立句

独立句の中で、動詞が troncamento が行われているものは、異なり語数は少ないが頻度は高い。作品中に複数個出現したものには、以下のようなものがある。

- per dir cosi : 30例
- per dir meglio : 5例
- a dir vero : 3例

これらは、ほとんど慣習的に用いられており、こ

のような独立句が使用される場合は、必ずその動詞は *troncamento* されている。しかし *per dir cosi* の変異形である。 *per cosi dir* の場合、 *troncamento* の形で使用されているのは、次の1例のみである。

- (5) …… *tanto è il desiderio, o per cosi dir, la sete, che l'animo ha del godimento* (OP, p.887)

「魂が快楽に対して感じている欲求つまり渴望はそれほど大きなものなのだ」

しかし、これはまれな例といえる。 *per cosi dir* で使用されているのは、(5)の1例のみで、 *per cosi dire* という *troncamento* が起こっていない句で使用されているのが(6)を含め9例見られる。

- (6) …… *le due sommità, per cosi dire, dell'arte e della scienza umana* (OP, p.749)

「二つの頂点つまり芸術と哲学」

これは、「休止の前での *troncamento* は起こらない」という記述²⁰⁾に合致したものであるが、すべての場合にこの記述が当てはまる訳ではなく、例外も(5)のように若干見られる。

3. 3. 2. V+NP

次に、 *troncamento* されている動詞がNPをとっている構文を扱う。この中で複数個出現したものは、以下の通りである。

far giudizio : 4例
aver luogo : 3例
mutar luogo : 2例
dar piacere : 2例
far questo : 2例
acquistar fama : 2例
esser cagione : 2例
far paura : 2例
far altro : 2例

far uso : 2例

finir la vita : 2例

このNPをとる動詞の中で、(7)のような冠詞なしの名詞句をとる例が89例、(8)のような冠詞付きの名詞句を取る例が17例見られた。このことから分かるように、圧倒的に動詞+名詞(無冠詞)という構文の場合に *troncamento* されやすいということが指摘できる。

- (7) …… *andava con grandissima alterigia gridando e comandando alle persone di dar luogo* (PE, p.1128)

「(ある人が) 誇りありげに人々に道を開けろと命じたり叫んだりしていた²¹⁾」

- (8) *In verità che mancava loro occasione di esercitar la pazienza, se non erano le pulci* (OP, p.630)

「実は蚤でなくても忍耐力を鍛える機会は不足しない」

また、動詞+冠詞+名詞の構文における冠詞は、(8)のようにすべて女性定冠詞で、その他の冠詞の例は見られなかった。これは、男性単数の定冠詞の *il* が母音で始まるために *troncamento* されにくいためと思われる。

3. 3. 3. 助動詞/準動詞

次に、助動詞/助動詞²²⁾が *troncamento* されているものを扱ってみる。ここに分類されるものの中で、複数個出現した例は以下の通りである。

vien fatto : 4例
vuol dire : 4例
dover essere : 3例
suol essere : 3例
aver fatto : 3例
esser fatto : 2例
aver posto : 2例
aver goduto : 2例
voler essere : 2例

上記のような連続の場合、*dover essere*を除いて、必ず *troncamento* が起こっている。*dover essere* の場合は、*troncamento* していない場合が以下のように 2 例見られる。

- (9) …… *come che egli giudicava dovere essere gli uomini tanto meno facili a gittare volontariamente la vita* (OP, p.591)
 「彼(神)は人間が自ら進んでその生命を投げだそうとすればするほど(……)になるに違いないと断定した」
- (10) …… *che da principio immaginò dovere essere di pietra* (OP, p.708)
 「彼(アイスランド人)は最初石からできていると想像した」

このように、母音で始まる語の前では、統語的な結びつきが強くても、切断されているものとされないものとの揺れが見られる。これは、母音で始まる語の前では *troncamento* が起こりにくいという傾向を示すものであると考えられる²¹⁾。

4. 結 語

本稿では、三つの言語学的側面から、「ほとんど起こらない」とされているイタリア語動詞の *troncamento* の分析を試みたが、その結果、以下のことが指摘できる。

- (a) *r* の前の語末 *-e* の *troncamento* が圧倒的に多い。これは、(e) の指摘に関係する。
- (b) *troncamento* される直前の音と後続の語頭音が同じであれば、この現象は起こらない。

(c) 後続の語頭音が音の強さの強い場合に *troncamento* されやすい傾向にある。

(d) 後続の語頭音が直前の音韻と音韻特性が近いと *troncamento* されにくい傾向がある。

(e) *troncamento* される動詞形態は、ほとんどが不定法不定詞である。

(f) 規則動詞の活用形は *troncamento* されない。これは、数と人称の概念を含む活用語尾を切断することによる不明瞭さを防ぐためと思われる。

(g) 不規則動詞の活用形の *troncamento* は直説法現在形に限られている。

(h) 規則動詞より不規則動詞のほうが *troncamento* されやすい。

(i) 頻度の高い統語連続の *troncamento* は、慣習的に使われているものが多い。

以上、Leopardi の言語材料をデータとして動詞における *troncamento* について述べてきたが、この現象が *troncamento* される後続の語頭音と大きく関係しているということは動詞だけに限定されるものではないと思われる。即ち、安定している CV 音節構造を *troncamento* することによってより複雑な構造にするものであるから、*troncamento* される語とその後に連続する語は自然と密接な関係になければならないのである。そのことは、本稿の音韻、統語の側面での分析でも明らかである。つまり、音韻的側面では (b), (c), (d) で指摘したように、後続する語頭音は音韻特性の異なる音が連続しやすいという傾向が見られるし、統語的側面では (i) で述べたように慣習的に使用されているものが頻度が高い。このような傾向は、他の品詞における *troncamento* の分析によって明らかになると思われる。この考察に関しては、別稿で触れることにする。

註

- 1) もちろん通時レベルの音韻変化の過程においては、このような脱落はしばしば起こっている。また、語末に関していえば、現代フランス語や現代イタリア語の定冠詞が母音で始まる名詞の前で、定冠詞の語末母音を脱落させるという現象があるが、これは定冠詞と名詞を合わせて、一つの CV 音節構造を作っているためと考えられる。
- 2) Schane (1973) では、このような音節構造の過程を “preferred syllable structure” と呼んでいる。詳しくは、Schane (1973 : 53) 参照。

- 3) 多くの文法書では、この条件として次のようなものを挙げている。
1. 語尾母音の前が子音 l, m, n, r のいずれかである
 2. 切断される母音字は e, o, a である
 3. 次に来る語の語頭が s impura か z, gn のときは起こらない
 4. 最後のシラブルにアクセントがある語や単音節語は起こらない
- 4) "In moltissimi casi l'apocope, pur teoricamente possibile, non avviene." (Serianni, 1988 : 26)
- 5) イタリア語の e, o には閉口と開口の二種類の母音の存在が認められている。つまり e の場合は閉口母音の [e] と開口母音の [ɛ] であり, o は閉口母音の [o] と開口母音の [ɔ] である。これに関してはアクセントが重要な要因となる。つまりアクセントのない母音は常に閉口音となる。そして語末にアクセントがある単語には閉口音には閉口アクセント記号 (´), 開口音には 開口アクセント記号 (˘) をつける。
- 6) つまり, [k], [g] の前にくると [ɸ], [f], [v] の場合 [ɸ], その他の場合は [n] になる。しかし *troncamento* の場合, 切断音が母音に限られるため [n] に限定される。
- 7) その他, 以下のような条件も述べられている。
- "l'apocope non avviene di norma davanti a pausa," (Serianni, 1988 : 25)
- "si deve evitare l'apocope sillabica davanti a vocale," (Serianni, 1988 : 25)
- "Fa eccezione, nella poesia tradizionale, l'apocope vocalica in fin di verso." (Serianni, 1988 : 25)
- 8) 作品中に出てくる引用文は, データとして扱わない。
- 9) 本稿で使用したデータは, 1991年に山口大学大学院人文科学研究科に提出した修士論文『レオパルディにおけるイタリア語動詞の研究』の添付資料の一部に基づいている。
- 10) ここで収拾した動詞という品詞には, 名詞を修飾する過去分詞・現在分詞は除外した。また, 本稿では散文のみを扱うことにし, 作品中に出てくる韻文は, データとして収集しなかった。
- 11) ここで補足的に音節の切断の場合について触れておく。それは l, m, n, r という子音が重なる場合, その子音字と語末母音が同時に切断されるという音節の切断である。本稿で扱ったデータにおいては, 音節切断されているのは -re だけであり, それは por (OP, p.725; p.879; p.881), espor (OP, p.742) の 4 例で porre とそれに接頭辞のついた esporre に限られている。しかし, 本稿ではこの音節の切断については, これ以上触れないつもりである。
- 12) これは形態的側面でも述べるように, イタリア語の不定詞の語尾が -re であるということが影響しており, 他の品詞でこのような片寄りが出るかは今後の研究にゆだねることにする。
- 13) 休止符 [.,] の前での *troncamento* を示す。
- 14) "The hierarchy is approximately as follows (strongest first): plosive, fricative, nasal, liquid, glide" (Hawkins, 1984 : 66)
- 15) 調音点に関しては, 顕著な特徴は見られない。しかし r, l, n は歯茎音であるが, 後続の語頭音は歯茎音が少ないということが分かる。参考までに調音点における分布を示す。

直前音 調音点	[r] (%)	[l] (%)	[n] (%)	合計 (%)
両唇音	27.2	6.3	28.6	26.2
唇音	10.1	18.8	35.7	11.7
歯音	13.6	37.5	35.7	15.8
歯茎音	15.7	—	—	14.2
硬口蓋音	2.1	—	—	1.9
軟口蓋音	24.4	18.8	—	23.0

上野：イタリア語の語尾切断現象(1)

- 16) trovare の活用を例に出してみると、下線の形態が可能になる。
- 17) 例えば venire の場合を考えてみると、直説法現在形と遠過去形の三人称単数も可能になる。
- 18) 規則動詞も不規則動詞も含めて、不定詞の語尾が -are で終わるものを第一群動詞、-ere で終わるものを第二群動詞、-ire で終わるものを第三群動詞として分類した。
- 19) この動詞群の中に -durre, -porre, -trarre で終わる動詞を含めた。
- 20) 註 7) 参照。

16) の註

直 説 法				
	現 在	半 過 去	遠 過 去	未 来
1s	trovo	trovavo	trovai	troverò
2s	trovi	trovavi	trovasti	troverai
3s	trova	trovava	trovò	trovera
1p	<u>troviamo</u>	<u>trovavamo</u>	<u>trovammo</u>	<u>troveremo</u>
2p	trovate	trovavate	trovaste	troverete
3p	<u>trovano</u>	<u>trovavano</u>	<u>trovarono</u>	<u>troveranno</u>
不 定 法				
不定詞	<u>trovare</u>			
現在分詞	trovante			
過去分詞	trovato			
ジェルンディオ	trovando			
接 続 法		条 件 法		命 令 法
	現 在	半 過 去	現 在	現 在
1s	trovi	trovassi	troverei	—
2s	trovi	trovassi	troveresti	trova
3s	trovi	trovasse	troverebbe	trovi
1p	<u>troviamo</u>	<u>trovassimo</u>	<u>troveremmo</u>	<u>troviamo</u>
2p	troviate	trovaste	trovereste	trovate
3p	<u>trovino</u>	<u>trovassero</u>	<u>troverebbero</u>	<u>trovino</u>

17) の註

直 説 法		
	現 在	遠過去
1s	vengo	venni
2s	vieni	venisti
3s	<u>viene</u>	<u>venne</u>
1p	<u>veniamo</u>	<u>venimmo</u>
2p	venite	veniste
3p	<u>vengono</u>	<u>vennero</u>

- 21) PE の訳に関しては、註 9) の参考として添付した訳を使用する。
- 22) イタリア語では、essere, avere のみを助動詞と呼ぶ。本稿では、不定詞や過去分詞を従えてその意義になんらかの意味を加えるような動詞を準動詞としてここに含めた。
- 23) そのほかにも troncamento された語の後に副詞、形容詞、節等が連続する例もわずかにみられたが、顕著な特徴はみられなかった。

例 文 出 典

Leopardi, Giacomo. 1984. *Opere*, a cura di Mario Fubini. Classici Utet.

参 考 文 献

Casale, Ottavio M. 1981. *A Leopardi Reader*. University of Illinois Press.
 Ceppellini, Vincenzo. 1990. *Dizionario Grammaticale*. De Agostini.
 Creagh, Patrick. 1983. *Moral Tales*. Carcanet New Press.
 Devoto, Giacomo. 1984. *Il Linguaggio D'Italia*. Biblioteca Universale Rizzoli.
 Fogarasi, Miklós. 1983. *Grammatica Italiana del Novecento*. Bulzoni Editore.
 Hawkins, Peter. 1984. *Introducing Phonology*. Hutchinson.
 Lepschy, Anna Laura & Giulio Lepschy. 1984. *La Lingua Italiana*. Bompiani.
 Migliorini, Bruno. 1983. *Storia della Lingua Italiana*. Sansoni Editore.
 Pietro, W.S. di. 1981. *Pensieri*. Louisiana State University Press.
 Renzi, Lorenzo. 1988. *Grande Grammatica Italiana di Consultazione*. Il Mulino.
 Schane, Sanford A. 1973. *Generative Phonology*. Prentice-Hall.
 Serianni, Luca. 1988. *Grammatica Italiana*. Utet.